

糸魚川ジオパーク —自然的文化財の保護と活用—

竹之内 耕（糸魚川市教育委員会 博物館／副参事・学芸係長）

1. はじめに

自然と歴史・文化を示すもの、すなわち文化財の保護や活用の施策は、文部科学省とそれに対応した自治体の部局が関わりながら行われており、文化財は、日本人にとって身近なものになってきている。一方で、文化財個々に対するイメージはお宝的でそれぞれ独立した自然の、あるいは歴史的な価値を発信しているようにみえる。活用という視点からいうと、文化財をお互いの関連の中で、あるいはシステムの中で位置づけて示すことが求められるのかもしれない。

文化財の保護と活用が、ジオパークの中で重要なこととしてとらえられている。詳しくは後述するように、ジオパークは、自然と歴史・文化を見学対象とするジオツーリズムによって、持続可能な社会を実現しようとする学習公園である。ジオパークは、文化財さらには自然公園がもつ要素を包括するもので、自然と歴史・文化を融合させる展示ツールともいえる。2007年以降、日本各地でジオパークの建設と活動が始まっている。ここでは、新潟県糸魚川市の糸魚川ジオパークにおける文化財の保護と活用の取り組みを報告する。

2. ジオパークとは

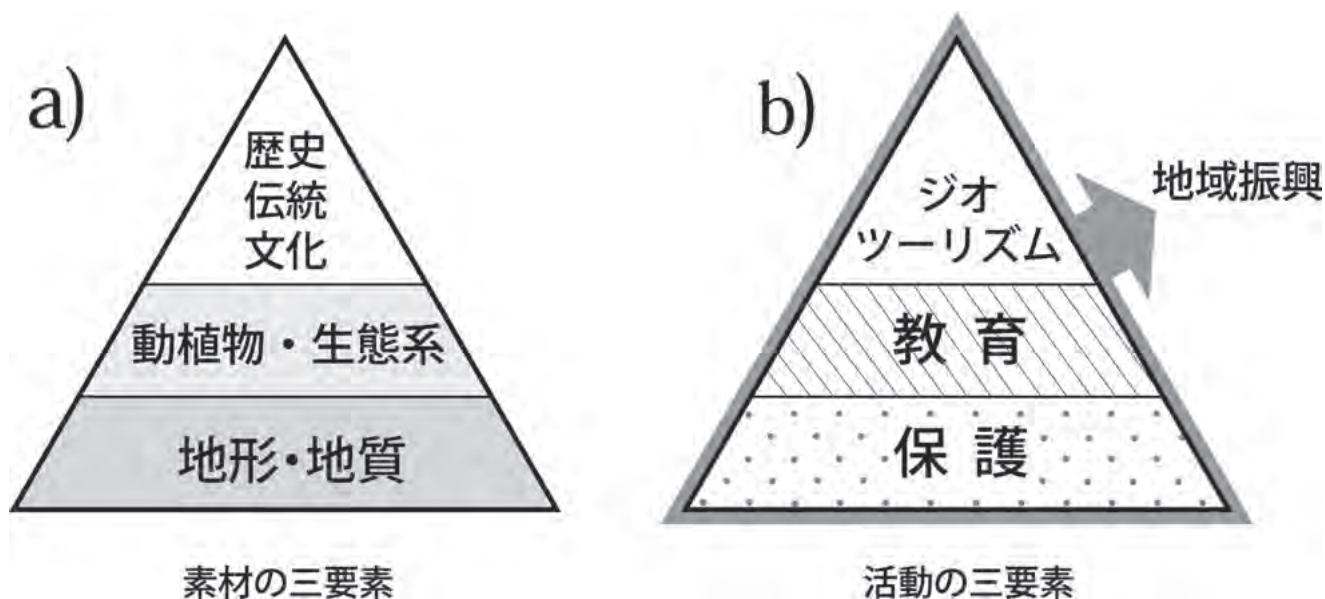
ジオパークはユネスコが支援する取り組みであり、「大地の公園」と訳される。ここでいう大地には、後述するように、地形や地質のほか動植物や歴史・文化も含まれている。保護が目的の世界遺産に、積極的な学習機能を付加したものがジオパークである。ジオパークは持続可能な社会を実現するための啓蒙ツールであり、世界遺産で弱いとされる学習機能を補完しながら21世紀前半に成長する取り組みではないかと期待されている。

（1）ジオパークに必要な素材と活動

ジオパークについて、ユネスコが示した世界ジオパークガイドラインやPatzak and Missotten（2007）を参考にまとめると以下ようになる。

ア. 素材の三要素

ジオパークは大地を学習する場所であるので、素材（学習教材）が必要である。これらには、①大地（ここでは狭義、地形や地質を指す）だけでなく、②動植物や③人々の歴史・伝統・文化などに関する素材が含まれることに注意しなければならない（図－1）。ジオパークの目的は、持続可能な社会を実現するための基礎知識、



図－1. ジオパークの素材と活動の三要素

すなわち、地球と人からなるシステムとその変遷を学んでもらうことにあるので、これら三要素間の相互作用や関連などがわかるように示される必要がある。地形や地質の要素が全くなければ、従来の自然公園や歴史公園の範疇であり、これらの三要素の素材がそろってはじめてジオパークといえることになる。

イ. 活動の三要素

①保護、②教育、③ジオツーリズム（学習観光）が活動の三要素である（図－1）。これらの三要素がうまく実践されると地域振興につながるという。保護は、ジオパーク運営の基礎である。素材の消滅は学習教材の減失を意味し、ジオパークが存続不能になる。教育は、ジオパークのメッセージを伝える方法であり、その実践である。具体的には、ツアーガイド、教育プログラム、野外解説板、ガイドブック、体験学習などが求められている。ジオツーリズムは、ジオパークのメッセージを不特定多数の人々に伝えるための装置である。ジオツーリズムという新しい旅行スタイルが人々の中に定着することで、ジオパークに大勢のジオツーリストが訪れる。その結果、経済振興がなされて持続可能なジオパークが実現し、将来にわたり持続可能な社会を探究・学習できる場所が保障される。

3. 世界と日本のジオパークの現状

世界ジオパークの活動は、世界ジオパークネットワーク（以下、GGN）によってユネスコの支援を受けながら推進されている（渡辺、2011）。GGN は各国の世界ジオパークから構成されており（現在、26ヶ国に92地域、2012年11月現在）、世界ジオパークの認定は、すなわちGGN への加盟でもある。世界ジオパーク認定のためには、書類審査と現地審査をへる必要がある。

日本では、日本ジオパーク委員会が定める基準を満たすと「日本ジオパーク」を名乗れる。現在、以下の25地域が認定されている（2012年10月現在）。

白滝（北海道）、洞爺湖有珠山（北海道）、アポイ岳（北海道）、男鹿半島・大潟（秋田県）、八峰白神（秋田県）、ゆざわ（秋田県）、磐梯山（福島県）、茨城県北（茨城県）、糸魚川（新潟県）、下仁田（群馬県）、秩父（埼玉県）、南アルプス（中央構造線）（長野県）、銚子（千葉県）、箱根（神奈川県）、伊豆大島（東京都）、伊豆半島（静岡県）、白山手取川（石川県）、恐竜溪谷ふくい勝山（福井県）、山陰海岸（京都府・兵庫県・鳥取県）、隠岐（島根県）、室戸（高知県）、島原半島（長崎県）、天草御所浦（熊本県）、阿蘇（熊本県）、霧島（宮崎県・鹿児島県）であるが、このうち、洞爺湖有珠山、糸魚川、山陰海岸、室

戸、島原半島の5 つが世界ジオパークである。

GGN 加盟申請書を提出するには、まず、日本ジオパークになって日本ジオパークネットワーク（以下、JGN）に加盟することが条件である。JGN 加盟も、世界ジオパークの審査と同様、書類審査と現地審査がある。

JGNは、日本にジオパークを定着・発展させて行くための組織でもある。お互いの情報交換、ジオパーク活動のノウハウの共有、情報発信などを行っている。一つのジオパークが活動を暗中模索するのではなく、JGN としてお互いにバックアップし合う体制がある。また、JGN はGGN の傘下組織として、世界のジオパークの活動ノウハウを共有できるようになっている。

4. 素材がつながり新たな価値が生まれる

（1）糸魚川ジオパーク

糸魚川ジオパークは、フォッサマグナや糸魚川－静岡構造線で代表されるような変動帯にあり、日本最大のヒスイ産地でもある。糸魚川の大地には、古生代・中生代・新生代の岩石がそろい、岩石の形成環境も多様である。日本列島形成の5億年以上におよぶ大地の歴史がある。また、日本海から北アルプスへおよぶ高度変化（標高0m～2,766m）があって地形変化に富み、それらに対応した動植物も多様である。さらに、糸魚川地域は東西文化の境界地域とされ、人々と大地の結びつきも強い。世界最古のヒスイ文化、大断層・糸魚川－静岡構造線（以下、糸静線）に沿ってできた塩の道、地すべりと棚田、活火山と温泉・火山砂防などもある。糸魚川ジオパークには、24ヶ所のテーマとストーリーをもったジオサイトがあり、それぞれのジオサイトには、複数の見学地が用意されている。

（2）ストーリーで価値を高める

ジオパークで旅行者が見るべきものは、先述した三要素に加え、郷土料理、お酒、農水産物、お土産なども含まれる。楽しんで知らず知らずのうちに学んでいるのがジオパークのめざすところである。その初めとして地域にあるさまざまな素材の関連性を一つのストーリーとして提示することが求められている。地元の人々がなにごく普段から見慣れている山並み、崖、古城の遺跡、古道、祭事などが融合すると新たな価値が生まれ、ジオパークへと旅行者を引きつけることも可能になるというものである。次に、糸魚川ジオパークの代表的なジオサイトである「糸静線と塩の道ジオサイト」のストーリーを紹介する。このストーリーに沿ってガイド付きツアーが行われている。



図－２．塩の道



図－３．糸魚川－静岡構造線の断層



図－４．塩の道資料館

５．大断層と塩の道のストーリー

塩の道（国指定文化財、図－２）は、戦国時代に越後の上杉謙信が、甲斐の敵将・武田信玄に塩を送ったと伝えられる古道である。ここから「敵に塩を送る」という言葉が生まれた「義塩の道」である。この道は、越後と信州を結ぶ重要な交易路であり、越後からは塩や海藻などの海産物が、信州からはタバコや穀類が往来した庶民の生活の道であった。城山と呼ばれる山には根知城跡（県指定文化財）があり、上杉配下の城であった。川中島の合戦の遠因になったとされる、上杉に助けを求めた信濃の武将・村上義清が城主となったとされ、ここは信州に対する越後の重要な最前線基地であった。

塩の道は、糸静線の断層経路をたどるように山間部

に続いている。この断層（市指定文化財、図－３）は、フォッサマグナパークで見学できる。大断層が通過することによって周囲には幅の広い断層破碎帯ができて脆弱になり、そこが選択的に侵食されて低地帯ができあがった。結果的に、その低地に沿って塩の道がつくられたことになる。山間部を深く刻む姫川溪谷は、土石流をたびたび流す暴れ川であり、姫川に沿って道をつくることは困難であった。

古道沿いには、石仏、道標、茶屋跡などが残り、季節ごとに色が変わってゆく雑木林の中を道がたどる。荷を運んだボッカの運搬道具（国指定文化財）が塩の道資料館（図－４）で展示され、往時の運搬の苦労が偲ばれる。ボッカは積雪期でも荷役を積極的に買って出たとされ、農閑期のよい副収入になったという。文政年間、ボッカ宿（発



図－５．奴奈川姫と建御名方命

掘されて基礎が展示)が雪崩に襲われ、犠牲になったボッカを供養する白池地蔵が道のわきにたたずんでいる。

塩の道が続く新潟・長野県境部には、今も県境が設定されておらず、国土地理院発行の地形図(縮尺：25000の1)にも図示されていない。これは江戸時代から続く国境争いの結果である。この国境地域の杉の大本に長野県・諏訪大社の神官が鎌を打ち込む薙鎌の神事(長野県指定文化財)が7年に一度行われている。この神事は国境の確認の意味があるとされる。一方、諏訪大社の祭神は建御名方命であり、古事記に登場する奴奈川姫(糸魚川にいたとされる)と大国主命の子とされ(図－5)、望郷の念を含む神事かもしれない。

6. ストーリーを伝えるために

今まで、個々の文化財を組み入れストーリーとして組み立てる利点を述べた。ここでは、人々にストーリーを伝えるための取り組みを述べる。先述したジオパーク活動の三要素の具体的な例である。

(1) 保護活動

素材については、既存の法律等によって保護されることになる。ジオパークになったからといって、法的な保護の網が新たにかかるわけではない。貴重なものや区域は文化財保護法や自然公園法によって、あるいは行きすぎた開発を抑える海岸法や河川法などとともに、それぞれ保護されているのが現状である。また、自主的な保護意識の醸成もジオパークの重要な役割だと考えている。ジオパーク来訪者に保護意識をもってもらうように、ジオパークガイドの解説の中で、あるいは、野外解説板やリーフレットなどで呼びかけている。

(2) 教育活動

ジオサイト見学用に用意された野外解説板、リーフレット、マップなどのほかに、生涯学習や学校教育の分

野での活動を紹介する。

ジオパークの特徴は、ガイド付きツアーが充実していることである。このため、市民がジオパークガイドになるための研修制度、試験制度がつけられている。また、市民のふるさとを知る意欲の継続のため、ジオパーク検定(初級・上級・達人)が行われている。さらに、飲食業や宿泊業施設、理髪店などの経営者・従業員を対象としたジオパークマスターの講習会も実施しており、受講すると「ジオパークマスターのいる店」というのぼりを立てることができる。地域の公民館活動でもジオサイト見学会が行われるようになっている。

学校教育では、ジオパーク学習を積極的に理科、社会科、総合学習に取り入れている。教員向け研修や副読本づくりも行われている。今年度は小学校理科のための副読本が作成中で、来年度以降、中学校理科、総合学習のための副読本の出版が予定されている。香港ジオパーク(世界ジオパーク)と姉妹提携が結ばれ、昨年度から中学生の交流が始まっている。

(3) ジオツーリズム

ガイドツアー(定期観光バス「ジオま〜る号」)が実施されている。また、個人来訪者にも予約制でガイドをつけることができる。来訪者の輸送や宿泊・案内、また、食やお土産の開発、イベント開催なども快適なツアーを支えるものであり、改善のための努力を行っている。ジオパークを契機に駅レンタカーが開業し、タクシーによるジオサイトめぐりコースも新たに開設された。「断層かまぼこ」、「ブラック焼きそば(イカ墨を使用)」などが開発され、ジオサイトに関連した居酒屋メニューも登場した。農産物、海産物などのブランド化もすすめられている。

7. おわりに

文化財の保護と活用の取り組みを、ジオパークを例に述べた。文化財はジオパークに必要な不可欠なものであり、文化財をマネジメントしている組織とジオパーク組織がもっと接近すべきであると思う。お互いの成果や利益が期待できるよいパートナーになる可能性は十分すぎるほどあると思われる。

【文献】

- 1) Patzak, M. and Missotten, R. (2007): ユネスコのジオパーク活動; 地質ニュース, 635, p.p.21-24
- 2) 渡辺真人 (2011): 世界ジオパークネットワークと日本のジオパーク; 地学雑誌, 120, p.p.733-742